



# いなくなれ、群青

矛盾した僕たちは、  
それぞれ理想をめざす。

ある夏の日、高校1年生の七草は気がつくと見知らぬ島に立っていた。そして、その島で最初に出会った人物にこう告げられる。

「ここは、捨てられた人たちの島です。この島を出るには、七草くんが失くしたものを、みつけなければいけません」

そこは、生活に必要な環境はすべて整っていて多くの人が暮らしているが、全く外には出ることができない、「階段島」という現実離れした島だった。人と話すことができない、自分の素性を明かせないなど、何らかの欠点をもった「捨てられた人たちが」暮らすその島で、七草は3年前に離れなれになった少女、真辺と再会する。その日を境に、彼の日常は大きく動き始める――

今回紹介する作品は、河野裕の小説『いなくなれ、群青』だ。主人公の七草は根っからの悲観主義者で、島に迷い込んでからしばらくは島を脱出することを諦めて階段島での日常を受け入れていた。しかし、どこまでもまっすぐな理想主義者である真辺と再会し、彼女が周囲の人々を巻き込みながら島で起こる事件の解決を図るのを目にするうちに、七草の心境に変化が現れ始める。「失くしたもの」とは何なのか、自分たちはなぜここにいるのか。一度は解決を諦めたさまざまな問題を解決するために、七草は少しずつ変化していくようになる。

理想主義者の真辺が追い求めるものと、悲観主義者の七草が導き出す答え。矛盾するふたりの行動は、私たちに理想と現実まつわる疑問を投げかける。困難な状況に陥ったとき、真辺のように苦労しても自らがめざすものを追い求め続けるのか、それとも、島に來たときの七草のように現状を受け入れて立ち止まるのか。2つの立場の間で揺れる七草からは、そんな答えのない問題と向き合うヒントを得ることができる。私たちが諦めてしまったものをもう一度見つめ直すきっかけとなる、そんな「階段島」の世界に、あなたも足を踏み入れてみてはいかがだろうか。



『いなくなれ、群青』  
著者：河野裕  
出版社：新潮社  
定価：590 円（税別）

はみだし  
すてーじ

5月病になりそうです……。  
⇒いなくなれ5月病！

（工・2 きゅーり）  
（そんな簡単にいけば苦労はしないですね……；編）